
君と私の秘密。

エンナ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と私の秘密。

【Nコード】

N4574W

【作者名】

エンナ

【あらすじ】

私、野田 茜は地味、暗いなどと嫌われ者。それでいい。・・・
目立つことが嫌いな私はメイクまでして地味な自分を作った
だけどそれが一番バレちゃいけないあいつにバレて・・・！？

バレちゃいました

「ええーつと……野田さん？」

彼は驚きを隠せずすっぴんの私を見ていた。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

私、野田^{のだ あかね}茜は一応普通の高校生。ただし、ある部分を除いて。目立つのが昔から嫌いで、苦手でいろんなものを避けてきた。そう、今まで。

中学校に入った時、メイクを覚え髪を伸ばし目立たぬような大人しくて暗くて静かな子を演じてきた。勉強はできるけど、体育がダメ。体が悪くて……と嫌われ、いじめられる子を作ってきた。大事なこともなでもう一回言っけど……そう……今まで。 つい、今まで。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

私と彼・三矢^{みつや ゆうすけ}祐介は暫く見つめ合っていた。

「祐介え？どした？なんかいたの？」

彼の友人が声をかけるまで、だ。

私は彼にジェスチャーで『教えないで』と伝え“あの彼”も理解してくれたようで友人にこういった。

「俺用事思い出したし、先帰ってて」
ナイスナイス。

友人が帰ったところで私は改めて彼に言った。

「お願い！誰にも言わないで」

「・・・・・・・・・・わ、分かってる」

しばらく沈黙が続く。沈黙の間、彼の説明でもしよう。

顔はなかなかのイケメン・・・・いや、十分もつてのイケメン。だけど、皆彼を「残メン」と呼ぶ。勿論訳があり・・・・・・・・。

彼は運動神経抜群、友達もたくさん！恵まれた容姿・・・・・・・・・・だが。

頭がものすごく悪いのだ。

この間のテスト、5教科500点満点のテストがなんと合計70点。結構簡単な範囲だったんだけどな・・・・・・・・。

「あの、野田さん！」

「え？あ、何？」

「今の顔って・・・・・・・・メイク？」

指さすな。やっぱりギャップひどのかなー。

自慢じゃないけど、この顔で街中歩くとスカウトが必ずかかる顔。モデルとかのね。

「うっん。これが素。いつものがメイクだよ」

「・・・・・・・・・・ッ」

三矢君は口元を抑えた。それほど衝撃スゴイかな・・・・・・・・。

「ね、えと・・・・・・・・裏門から出よう！バレなきゃ大丈夫！」

「・・・・・・・・・・うん」

彼はため息みたいな返事をした。ごめんね、被害者だね・・・・・・・・。

約束と残メン君

ここは近所の喫茶店。

例の残メン君とこれからの打ち合わせを行いまーす！

「……ごめん、おごってもらって」

さすが残メン。

ゲーム買って無一文とは笑わせてくれるわね……。おかげで今月ピンチじゃない……。あ、なんでもない。

「ううん、いいの。それよりさっきの話だけど」

「……バラしちゃう……ダメなんだよね。じゃあさ」

何・・・？交換条件・・・！？

と私はハラハラしつつ「何？」と恐る恐る聞き出した。

「勉強教えてよ」

残メー……ン！！

私のハラハラ返せ！　びっくりしたあ……。　って別に変な妄想
なんかしてないから！

「そ、それだけ？」

「うん」

つく・・・。小学生みたいに無邪気に笑いやがって・・・。
 ばかあ・・・。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

作戰會議終了。

喫茶店を後にした私は学校の知り合いに会わぬようにこそと帰りましたとき。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

翌日。

無論私はいつもの変身をして登校。

「おはよ！野田さん」

•
•
•
•
•
•
•
○

何で話しかけてくるのよー！！！！！！

何でも言えないし、呼び出すことも今のカツコじゃ不可能なので思いつきり睨むと彼は思い出したらしく「あ．．．」と言っていた。だからと言って周りの視線はもう払えない。

もうー！！バカバカ！残メンツツ

私は思い切りトイレへダッシュした。

私は思い切りトイレへダッシュした。

「三矢君ッッッ！」

メイクを落とした私は早速怒りに行った。

誰もあの私だと思っていない。

「昨日の約束忘れたの!？」

「……すいません」

「今度やったら昨日の君が言ったこともナシだからね？」

「……ごめんなさいあい」

うぐっ

そんな声出すな！
私が悪いみたいじゃない！いいえ！悪くないわ！

「なあ、祐介、その人誰？」

「……えっ、ひ、秘密だよ……。自分で聞けばいいじゃないか」

「そーするわ。　ねー、君・・・っっていない！」
というところでチキンな私は逃げたとさ

やばいのとためらい

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・」

ただいま私たち・・・・とつてもやばい状態なのです・・・・。
同じクラスでしかも三矢君に恋心を抱いている彼女たちに出くわしたんです。

しかも場面が場面　　！！

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

回想しよう。なんでこうなったのか。

いつも通り登校して、いつも通り授業を受けて・・・・。
そう、時間は放課後だったのです。

誰もいない校舎裏で私は彼の前でメイクを落としていた・・・・。

それがダメだったの！トイレに入ってすればよかった！！

偶然、そう、ほんとーに偶然！

彼女たちが現れたのでした・・・・。

超短い回想終わり。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・」

かしゅん、と化粧道具を落とす私。　割れた？関係ないわ・・・・。
今の状況で考えてられない。

そう、バレた!!!

しかもメイクは半分落ちている。

確実に私だと断定できた。しかも男子じゃない。女子だ。噂なんて風のごとく広まるだろう。

「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

どうしよう。どどどど、どうしよう!

そんな目線を彼におく・・・・・・・・・・っておい。

例の彼・・・・・・・・三矢君は呪いにもかけられたように硬直していた。使えねえ。あ、じゃなかった。

「・・・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・」

逃げ場はない。

「ええーっと」

女子陣の一人が口を開いた。

私は過剰にびくついてしまう。

「・・・・・・・・・・あんた・・・・・・・・いや・・あなた誰ですか?」

やったー・・・・・・・・!! 気づいてない!!?

「ばっかねー! うちのクラスの野田さんじゃーん」

やったー・・・・・・・・!! ばれてんじゃん!

「ええー? まじい? それ素顔? つぶつは! マジうけるんだけどー」

えー、なにそれ、マジ日本語じゃないんだけどー。

なんて突っ込まない。私は突っ込まない。

「でえ? 二人で何してた系? 付き合ってる感じイ?」

私は「違うよ」とゆるく否定する。

「そおかあ、じゃあ、彼、借りてっていーいー? ちよつとあ、用事あるんだよねえー」

ああ、はいはいお好きにどうぞ。

「・・・・・・いいよ」

・・・・・・あれ？なんで私躊躇^{ためら}ったの？

日常

いつもふたりで勉強をする喫茶店で私は空だけ眺めぼーっとして
いた。

これでもう何分経ったかな。

「お客様？コーヒーのおかわりはどうですか？」

「え……。あ、結構です。」

「分かりました」

そのバイトさんらしき人はニツコリと微笑んで次のテーブルへ回
った。

空が青いな……。今彼、何してるのかな。きっと告白でもさ
れて付き合ってるんだろうな。

だってさっきの子私より可愛いし。ううん。私なんて大人っぽい
だけで可愛くなんかないもんね。

あーあ、自己嫌悪。ネガティブすぎるよ、私。

と今日で何回目かわからないぐらいのため息。

カランコロン、とドアがあく。

この音も何回目だろう。

「野田さん！」

……。へ？

「ああ、いた！」

み……。三矢……。くん？

「ななな、なんでここにいるの!？」

「え？いるかなー、と思つて急いできたんだけど……。あ！店
員さん、俺にもコーヒーください」

それだけ言つと彼は私の目の前に座つた。

「そーじゃなくつて！答えになつてない！」

「……さっきの人達の事？」

「………うぐ……そ、そうよ」

「断ってきたんだ」

「は？」

断ってきた？何を？

考えていることと同じことを私は彼に聞いた。

「付き合ってたって言われたんだ」

「………。そだよ。私馬鹿みたい。あの流れじゃ絶対。

「『こんな馬鹿な俺でもいいの？勉強教えてくれるの？』って聞いたんだ。

なんか相手も頭悪いらしくてさ『勉強は……』って口ごもったところを断ったんだ」

ふうーん……。

「ね、そんなことどうでもいいからさ、英文教えて欲しいんだけど」と、教科書とノートを取り出した。

いつもと同じじゃない。何だかなあ。

私はクスリと微笑んで「で、どこするの？」と問う。

彼はいつもの無邪気な笑顔を向けて「ここ、ここ！」と言った。

そっか。この日常、まだ続くんだ。

と、心のどこかでホッとしている私がいた。

日常（後書き）

もっと長くしたいけど気力が追いつかねえんだよ
馬鹿野郎ー！つゝ。。。。*：。

メイクと学校

あの日（三矢君の告白された日）から数日経った今日。
私はある異変に気づいていた。

「・・・・・・・・・・嘘」

いつもの近場の薬屋さん。そこでメイク道具を買っただけど
「・・・・・・・・・・都合により店を閉めさせて頂きました。本日まで誠に有難うございました」・・・・・・・・・・?!」

どとどどーしてくれるの!？他に近所に化粧品売ってるお店なんてないよ!？

あわわわわ!す、すっぴんで学校に行けとー!？

と、悶えている恥ずかしい場面を三矢君に見られてしまった。

「どうしたの?」

「!み、三矢君・・・・・・・・実は・・・・・・・・」

「・・・・・・・・つぷつは!それだけ?野田さん綺麗だし、そのままで行きなよ。ね?」

「・・・・・・・・・・ぐぬぬぬ・・・・・・・・」

まあ確かに。あの三人にバレたからきつと広まってるし・・・・・・・・。

ちなみにバレた日は金曜日。土曜日は学校がなかったので誰にもあつてない。

そして明日が（魔の）月曜日。

仕方ない。ここは腹をくくるしか・・・・・・・・。

「分かったよ・・・・・・・・。これで学校行くよ」

「なにそれ、俺悪いことしたみたいな」

「・・・・・・・・だねっ」

と私たちは笑った。

「・・・・・・・・いよつし・・・・・・・・」

私は「ふー」と大きく息を吐いた。

メイクはしてない（してるけど軽い）。

髪は整えた。

「学校行つてやる・・・・・・・・」

低い声で呟きバッグを掴む。

「行つてきますー!!」

無駄に元気を入れてそういった。

案の定。ほんつとーに予測通り。

私が教室に入つて自分の席にバッグを置くと「嘘!？」や「・・・・・・・・変わりすぎ」などと声が聞こえる。

そして最低なタイミングで

「野田さん本当にそれで来たんだー」

つて指さして笑う三矢君・・・・・・・・。笑うな、お前。

「三矢君がこれで来いっていったんじゃない。」

「そだっけ？」

無責任！

「もういいよ・・・・・・・・。はあ・・・・・・・・」

私が立ち上がると三矢君が

「どこ行くの？」

もうどーでもいいーでしょー？

「お茶買つての……」
「なんか逃げたかった。勿論お茶なんて言い訳だけどね……」

メイクと学校（後書き）

なんということか

俺の知らんうちに終わっていた最新話・・・何故・・・？

複雑

私はいつものように学校に行くため外に出た のだが。

「わわ……」

私の家の前に張り込んでいた様な子が焦りながら逃げ去っていく
場面を見た。

「……な、何？」

「それはあれだよ!!」

「あれ？」

学校に着いてから早速友人にそれを話した。

中学からの友人・川谷^{かわや} みえだ。

無論、メイクのことは前々から知っていた。 隠してくれていた優しい友人である。

「ストーカーじゃない？」

「ないわー」

私は彼女に即答した。

「ないね」

彼女もそれに即答する。 だよね。

「ま、でも、あんたはさ、元がいいしあるかもよ？」

「ないわー」

「ないね」

そんな時チャイムが鳴った。 みえは他クラスのためいそいそと
教室へ戻っていた。

どうやらこの授業は自習らしい。

代理の先生さえ来ないので私たちは自由にやっていた。

携帯がバイブレーションを始める。 みえからだ。

『で、あいつとはどーよ？』

あいつ？

『あいつって誰？』

と返すと間も開けず直ぐ様返ってきた。

『無論アイドルくんだよー』

あ、アイドルくんって……。 たしかにちやほやされ…………

って「どーよ」って!？

『どういう意味!？』

『もー、恥ずかしがらないでッ 付き合ってる? って聞いたの! 鈍感ッ』

『別にー』

文面では冷静だったけど、内心ありえないぐらい心臓が鳴っていた。

付き合う、という単語。 だってあっちがそう思っていないかもしれないし。

って、私だって三矢君のことそんな…………。

そういうことを考えていたら授業が終わった。

そのあと、「変なこと聞いてごめんね」とみえが謝りに来た。

私は「別に」と答えた。

その時、みえはちよつと悲しそうだったけど私自身どんな顔で答えたかなんて覚えてなかった。

ストーカー、じゃないよ

最近　三矢君との会話の数が減った。

別に嫌なわけじゃないけど、なんかちょーっと寂しいかなって思う
私^ががいた。

みえには、「喧嘩でもしたの?」と聞かれたけど特に思いつくア
テもないし。

ひとつ言えるとなれば、私がメイクをやめてから、男子に絡まれ
るようになった。

追いかけて追い回され逃げ続ける日々が続いたせいか、話す機会も減
った　のだろうか?

きい、と切な気に音を立て扉を開ける。

またあの^あの人だ。　今日も目が合うなり、そそくさと逃げようとする。
「ねえ」

思い切って声をかけた。　彼は「は・・・?」と足を止める。素
直だ。

「名前は?一緒に行こうよ」

「・・・^{あさま　じゅんた}浅間　淳太ツス」

「浅間・・・、あ!まさか例の不良君?」

格好は見る限り校則違反のオンパレード。

ワックスで整えた金髪、服やら耳やらにはキラキラ光るアクセサリ
ーが沢山。

そして何と言っても私と同じクラスなのよね。　まあ、不登校で会
ってないけど・・・。

「いつも学校行かないでどこに行ってるの?」

「・・・ゲーセンとか・・・カラオケとか・・・」

「そっかあ・・・ね!今日は出てみない?ねえ?」

「・・・あ、じゃあ・・・その・・・うつす・・・」

「ゲ……」

「うわ……」

などと、彼が現れると皆そんな反応をした。

「……っち、見てんじゃねーよ」

「浅間君！」

「
・
・
・
・
・
・
すんません」

何もしなければいい子なのになあ……。

「……野田さん」

「みつ……」

「そいつ誰？」

私が「三矢君」と言い終える前に彼はそう言う。

「えっと、朝途中であって一緒に来た……」

「俺は誰かって聞いてんだけど」

・
・
・
・
・
ツ
！

「…………えと、その……ごめん……あ、浅間君！浅間
淳太くんだよ」

どうしたんだろ？いつもと違うよ。なんか、こっ、怖いのに……

「はあん？お前がイケメン君かあ？頭悪いくせにちやほやされてよ・
・はっは」

「んだお前……」

二人とも――！？

何ガンつけ合ってるの！？　ちよ、やめ・・・・・・・・

「ほおーら、おまんら！」

ばあっしーん、と二人の背中をぶつ叩く。

「……みえ!!」

「あんたら茜を困らせたら殺すじゃスマネーゾ?」

「すんませーん」

二人は彼女の一言ですんなりと謝る。

みえは私の方へ振り向いて笑顔を向ける。

「うーっす!おは!教室行こうか」

「う、うん!」

「なんだよ、なんだよ……」

「川谷さん全部取ってくんだもんない」

淳太と祐介は二人むなしく教室へ向かった。

冬の

きゅ・・・・・・・・

「「「球技大会イイイイイイイイイイイイ！！」」」

「体育祭の次に嫌な大会名じゃない！！」

「ほぼ半日潰して極寒の日にやるという・・・・。ああ！嫌だわ！憂鬱よ！！」

「この通りクラスみんなはやる気。やる気。気が滅入るわ・・・・。中学生みたいに作戦決めとかしてるし・・・・。当分私の出番は・・・・」

「野田さんはどうする？」

「来たし。」

「ど、どうって？」

「出る？でない？」

「なな、なんつー選択肢！出ないという手もあて」

「いやー美人で目くらまししようぜ？選手決「いや待て待て」

「ふう、すんどめ成功。」

「運動は苦手じゃないけど、どうせ今年もドッチボールなんでしょ？」

「うん、まあ。なんで？」

「あのボール痛いの」

「率直な感想。本当に嫌なの。あれ。」

「どうしてバレーのボール使うわけ？痛いに決まってる。しかも季節は冬よ・・・・。寒いと痛みも増えるじゃない。」

「それだけ？ね、出てよ」

「やなのー」

「半ば子供みたいに嫌がる私。他にもいるでしょ、運動できる子。」「うーん、んまあでも来週だしまあいつか」

「出ないからね」
補欠でよろしく。

誰？

球技大会当日、私は補欠だった。

ほぼ元気のいい男子同士で遊んでいるような光景を、微笑ましく見学していた。

ふと目についた人。

三矢君だ。ちよつと声でも掛け……

そう思った刹那、三矢君は私の知らない女子に声をかけられ笑って話していた。

誰？その人は、誰？不安ばかりが過_よぎる。

「のーださん」

「！」

上から不意に声をかけられる。そのせいで、三矢君への集中は途絶えた。

声の主は浅間君だった。

「何してんの？」

「別にー？……浅間君レギュラーでしょ？行かなくていいの？」

「あ？ああ、ちよつと休憩貰ってさ」

そう、と八つ当たりっぽく素っ気なく返す。

関係ない人に八つ当たっちゃうなんて情けないよね……。

「野田さん？」

「え？」

ピピー、と頭が痛くなる音。――試合が終わったんだろう。

「俺行くね、次だし」

「あ、うん、頑張つてね……」

手を振りつつ見送る私。

そ、そくだよ！三矢君はど

あれ？ 居なくなっちゃった……。別に監視してた訳じゃないし……。

「あーっかね」

「みえ……」

「元気ないわねー。相談だったらあたしに何でもしなさいな」

「ありがと……でも、まだ大丈夫」

「ふーん」

（……あんたの“まだ”っていつなんだろうね。）

一人で抱え込んだじゃうのかな。私は、もっとみんなを頼らないといけないのにな。

体育館を出て少しした廊下。 自販機の前では

「ねえ、祐介エ」

「 なんだよ」

「最近一緒にいるあの子誰エ？」

「別に関係ねーだろ」

「あるわよオ」

にやにや笑う彼女。

そこへ、誰かが走ってくる音がした

あれ？あれってもしかして、三矢君？

私は無意識のうちに居なくなった彼を追っていた。そして、ここのでやっと見つけた。

って、あの女の人誰……？体操着きてるってことは同じ学年って

こと？

「三矢君！」

「！」

三矢君は私の呼び掛けで、すぐにこっちを向いた。 ちよつと嬉しいかも。

「あら。ビンゴ？」

「……………？えと、どなた……………ですか？」

「うふふ」

彼女は不敵な笑みを残しそそくさと逃げてしまった。
一体、誰だったの？

誰？（後書き）

俺も球技大会やだ

勘違いも程々に。

たたた、とさつき三矢と話していた女子がとあるクラスに戻ってきた。

「あ、裕理イ、どこ行ってたん？」

「別にどこも行ってないわ」

「嘘言うなああ！カレシにでも会いに行ったんじゃないの？」

「そんなんじゃないってえ」

恥ずかしそうに笑う。

「次試合だよ。応援よろ」

「はあーい」

「の、野田さん？」

「……なに」

あーあ、そうだね、三矢君だって彼女ぐらい居るよねモテるもん。

「ちょ、怖い……、俺試合だし応援頼むよ」

「はいはい」

「……………」

私馬鹿みたい。勝手に好きになって、さ。諦めないよね。

「ふはは！振られてやんの、祐介」

「うるせーな…へこむんだよー！！」

「はははは」

「ちくしょー、勝ってやる」

「ワアアア、と歓声。」

うちのクラスが勝ったみたいだ。べつにどーでもいいーんだけど……。
すると、三矢君が私の方へ寄ってきた。

「……野田さん」

「……」

「……の、野田さん何か勘違いしてない？」
勘違いい？という意味よ……。

「……さ、さつき一緒に話してたの姉貴なんだ！」

「はあ？」

「あ、いたいたー」

ベストタイミングでその女子が来た。

「もー、祐介ジューズ奢る約束でしょ」

「お金あげるから勝手に行ってろ」

「きびしー あ、あなたが茜ちゃん？いつも弟がお世話にーあ

のね、この子っあなたのこ」

「あーねーきー!？」

「……」

プ、クスス。そうだったんだ。なあんだ、結局勘違いじゃない。

「じゃーね。今度メアド交換しよーよ」

そう笑って走り去っていった。

「……ごめん、先に言わなくて」

「うっん、いいの。こっちこそ勘違いなんかしちゃって」

「そーだ、お詫びのかわりに……」

「？」

耳かして、と言う彼に従う。

「……」

「……！んもう！馬鹿にしないの！」

三矢君は嗤って逃げるように走っていった。

『野田さん、好きだよ』

勘違いも程々に。(後書き)

実際諦め悪いのは男だと僕は聞きました。

昔と

何度も何度もリピートされる昨日聞いた言葉。

『野田さん、好きだよ』

思い出すたびにどこか、奥から熱が湧く。

「……もつと話しづらいじゃない」

「んんー！？！なんだってえ！？」

今は昼食中。私はみえと一緒に食事をしていた。

「なんでもないよーだ」

「ふうーん？」

半信半疑な返事をするみえ。

私は外に目を向けた。ここ数日雨が降り続いていたのに何故か晴れていたのだ。

「良かったー久々にいい天気だね」

「雨降ると寒いしね」

「まあね」

かくゆう私は今日降ると思っていたが傘を持っておらず、雨が降らないことに安心していただけのだ。

「今日は早帰りだよ」

と、みえ弁当箱を片付けながらいう。

「五時間目の授業が終われば帰り。大事な会議があるんだって」

「邪魔者は帰れってか」

「だね」

私もみえに続き食べ終えたので弁当箱を片付ける。

まだ昼休みの時間はたっぷりある。

「何しよっか」

「昼食後の校内散歩でもいかが？」とみえ。
私は別にやることもなかったわけなので、額かざるを得なかった。
図書室行けばよかったかも。

私たちは中庭を歩きつつ会話をした。

「男子は元気に体育館でバスケットかな？」

「じゃないー？見てたらボール飛んできそう」

「わかるー」

三矢君もやるのかな？……じゃない！

だめだめだめ！！なんでいつも考えが三矢君に……。

「茜？」

「ふわぁー！？」

あ、えつと、

「みえ…ごめん」

「別にいいよ…」

偶然近場にあつたベンチに腰掛ける私。

「……三矢君かい？」

「……ち、ち、ち、ち、違うよおお？」

「凶星か」

「……うぐ……」

1テンポ置いて、みえが続けた。

「コクらないの？」

「……こ、

「告白だなんてそんな…無理だよ」

「なんで？」

「……なんでつて……」。

軽く唇を噛んだ。

「……嫌われてたら、嫌…じゃない……」

「なんで？なんで聞いてもないのにわかるの？」

「……あ……」。

「だめだよ。茜は昔から」

昔に

『昔から』。

そう言われて思い出した記憶。

昔から、そう、昔から周りに流されてばかりで自分の意思表示を
出来ずにいた。

ハキハキキビキビと物事をこなす、みえが心底羨ましかった。

いじめられている私を助けてくれたり、私の意見を代わりに言っ
たり。

その度々に言われる言葉。

「だめだよ、茜は」

「ちゃんと言わないと」

そればかりだった。説教じゃないことは分かってる。だけど、そ
れでも。

みえは知らない一つの出来事があるから。

意思の疎通。そんなごく普通で簡単な事は、この一つのことがあ
ったから、私に難しいと思わせる。

本当に小さな、小さな思い出のかけらの一つで、消えちゃいそうな
馬鹿っぽい記憶。

それは、小学校の時のことだった。

私だつて、意思を示すことを諦めているわけじゃない。ちゃんと向き合いたいと思っっているんだ。

そのきっかけとなるときが来た。

気になる人が出来たのだ。このことは、みえにさえ伝えてない。

みんなに分け隔てなく優しい人で、笑顔も絶やさず人気もの…クラスの中心的存在だった。

……あまりにも、こんな根暗な私には遠すぎて大きすぎる存在。

終業式も終わり、皆が解散する頃。

次の学年へ上がればクラス替えがある。二度と機会はないかもしれない。

私は意を決して、彼に告白をしたんだ。

……彼、なんて言ったと思う？

「お前みたいな顔だけの女子と、釣り合うわけないだろ」

って、言ったんだよ。勿論大当りだった。釣り合うわけない。

振られる決心もついてたけど、だけど、それでもその言葉は深く重く突き刺さった。

それから、彼とは同じクラスになれたけど、会話なんてもつての外。近付くことさえ避けられた。

そのせいか、私は一時期家に引きこもりがちだった。

学校なんて、友達なんて。会話なんて。

意思表示なんて。

みえは知らない。私しか知らない孤独の意思の記憶。
思い出したくなてなかった。

このことがあったから、もう恋なんてしない。顔も嫌い、そう、
決めたはずなのに。

昔に（後書き）

諦めんなよ……

応援してる人たちのことと思ってみるよ…！？

お前昔を思いださ

松岡さん好きです、エンナ…もとい本編クラッシュャー音無です。
みんな、勿論冬は松岡で乗り切るんだよね！？

雨音と雨足

「……………ね…茜!？」

「!」

みえに呼ばれ我に帰る。横目で見渡すと、教室。

「なあにぼーっとしてんの？あたし教室帰るね？」

「あ、うん」

そっけない返事。嫌な思い出を、思い出してしまった。記憶の、深くに沈めたハズの記憶を。

あの頃に比べれば、意思の疎通なんてあの頃じゃ想像できないくらい簡単になった。

親しめる親友。クラス。それは全て三矢君のおかげだと思った。

「……………」

チャイムが鳴った。五時間目が始まる。

雨足は、五時間目の中盤からひどくなった。

授業中、型破りなみえからメール。

『あたし車で帰るね』とだけの、珍しく絵文字も何もないそっけない文。

雨と、文が、私を不安へと追い込んだ。

「はい、H R 終わり。雨もひどいし気を付けて帰るように」

大雑把なH R。強まる雨音。勿論、傘はない。

「あちゃー……」

生徒玄関でみんなが帰ったあと、一人寂しく佇む私。

雨のノイズが気持ち悪いぐらい寂しくなる。

一人と言えば、最近はだいたい私と一緒に居てくれた人がいた。みえだったり、浅間君だったり、三矢君だったり。久々の一人か。なんか、さみしいな。

飛んでくる水しぶきが寒い。意を決して雨の中に飛び込むか？
だけど、そんな時。

「野田さん」

雨の音にかき消されない。よく聞こえる声。

「……三矢…君」

声の方へは向けなかった。

「どうしたの？一人で」

「…別にいいでしょ…」

「そう？ね、一緒に帰ろうよ」

俺傘あるんだよ、と言う。きつと笑っている。

素直に頷けない。よぎる告白。私があなたと一緒にいていいのか、
そんな不安と共に。

「………いい」

「いい？どっちの？」

「………一緒に帰らなくて、いい。先に帰って」

突き放し気味に、強がり気味に言った言葉は微かに震えていた気がした。

「………」

告白だからって、少しぐらい可愛いからって、調子に乗ってる私も悪い。

頭を冷やさないといけないの。離れないといけないの。

そんなマイナス思考になってたら、自然と涙が出そうになった。

「野田さん」

「………」

「野田さん」

「……………」

「茜」

「……………ッ！！名前で呼ばれるだなんて……！！
「こっち向いて、ちゃんと、俺の顔見てよ」

雨音と雨足（後書き）

（ 、 ）

雨音と雨足 三矢 side

偽装メイクをするのをやめた野田さんは、異常なぐらい可愛くて、
だけどその裏返しに、異常なまでに絡まれて。

助けに行きたい俺もいるけど、でも、彼女にとって俺はただの友達。
顔がいいだけの、残念くんだから。

みんなと野田さんが仲良くなつていくに連れて、俺と野田さんの
勉強で取り持った関係は、崩れつつあった。

毎日通つてた喫茶店も、一週間に一度と減った。

無論、彼女と喋る回数さえも。

そんな時、俺が姉貴と話していたとき彼女と勘違いした野田さん。
嫉妬だったのか、単に気になったのか、どうでもいいけどすごく嬉
しくて。

俺が、彼女を好きだと今更実感して。

勘違いと知った彼女の笑顔が、無駄に綺麗だったからすごくいじめ
たくなった。

からかうつもりで言った『好き』は本当の気持ちだったのかもしれ
ない。

* *

玄関で見た、野田さん。

いつもの笑顔で居るんじゃないくて、泣き出しそうな寂しそうな顔。
雨が怖くて震えている子供みたいな顔。

「野田さん」

と、俺は声をかけた。

雨にかき消されぬように。よく届くようにと。

「……三矢…君」

そう答えるだけで、こっちの方へは見てくれなかった。
気になって、問う。

「どうしたの？一人で」

「だけど、答えは素っ気なくて。」

「…別にいいでしょ…」と。

「そう？ね、一緒に帰ろうよ。俺傘あるんだよ」
と笑ってみせた。

「だいぶ長い沈黙があって、返ってきた返事。」

「……………いい」

「いい？どっちの？」

「……………一緒に帰らなくて、いい。先に帰って」

「いつもと違う、突き放すようなきつい声で言う。
そして再び、長い沈黙。」

「俺は耐えきれず、彼女の名前を呼んだ。」

「野田さん」

「……………」

「野田さん」

「……………」

「返事は返ってくるはずもなく。
焦らされた俺はついに」

「茜」

「と、呼んだ。」

「こっち向いて、ちゃんと、俺の顔見てよ」
泣きたくなる。切実な言葉。

「ただどはつきりと俺は彼女に言った。」

キライ、スキ

そっちに振り向けるわけない。

私は、人を好きになっちゃダメ…ならないって決めたはずでしょ。
ぎゅ、と唇を噛んだ。

「……あれ、本気だからね」

「知らない」

「俺、野田さんのことマジで好き」

「知らないよ…」

「ねえ、だからさこっち向いてって」

「嫌」

それだけ聞くと三矢君は黙り込んだ。雨の音がうるさいぐらい響く。

「喫茶店行こう」

「…今日はお腹痛いからだめ」

「じゃあ、うちで休む？」

「…家に居たいな」

「そっか じゃあ、俺帰るね」

やめてよ。わがままな女だって、怒ってよ…！

「……私…悪いことしてるのに…」

留めていた涙が溢れてきた。

立ってさえ居られず、座り込む。

「俺どれだけ野田さんに冷たくされても、好きだから許すよ。だから、俺のことも」

「……………」

今まで“嫌い”ばかり意思疎通してた。

目立つことが“嫌い”。球技大会“嫌い”。
だけど、今なら、

「私、私ね」

三矢君のこと、好きなの……っ
」

言える気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574w/>

君と私の秘密。

2011年12月29日20時51分発行